

『広島音楽史』編纂に向けて（第1回中間報告集）

戦前の広島における洋楽の普及

「広島音楽史」編纂プロジェクト編

「広島音楽史」編纂プロジェクトと本報告集の主旨について

本報告集は、2013年（平成25年）3月16日にエリザベト音楽大学で行われた日本音楽学会西日本支部第11回（通算362回）例会において、ラウンドテーブル「戦前の広島における洋楽の普及—『広島音楽史』編纂に向けて（中間報告会）—」と題して発表された内容を、各発表担当者が加筆・修正を加えながらまとめたものである。まずはプロジェクト発足の背景と経緯を簡潔に述べたい。

この「広島音楽史」編纂プロジェクト自体の発足は、報告会から約1年前のことである。だがプロジェクト発足のきっかけとなったのは、「ヒロシマと音楽」委員会という広島の市民団体が行っていたひとつの事業であった。すなわち、「ヒロシマ」をテーマとする音楽作品のデータベース化、ならびに作品の紹介を行っていた当委員会において、作品のみならず演奏などの活動も含めた幅広い「ヒロシマ」の音楽文化を捉えるべく、広島戦後の音楽史をたどる事業を2009年（平成21年）より始めていたのである。

しかしながら、原爆投下で多くの資料を焼失した広島については戦前の音楽文化状況の解明が手付かずのままとなっており、その課題への着手が急務であると思われた。その作業は同時に、原爆投下と終戦を境とする文化の連続性／非連続性を再検討することにも繋がるのではないかと考えた。そこでまずは戦前の音楽文化状況について調査を行うこととし、若手を中心とする現在のメンバーが集められた。一方、メンバーが持ち合わせる時間と力量の乏しさを考慮して、幅広い音楽文化の中でも「洋楽」に視点を定め、本プロジェクトを本格的に始動させることになったのである。

先に述べた中間報告会は、このプロジェクトの最初の調査報告会となるものである。よって、報告会では、個別の発表に先立ちまずは本プロジェクトの主旨について述べた後、報告会の主旨や定義付け、方法論などの説明をおこなった。以下、その内容をここで述べる。

○「広島音楽史」編纂プロジェクトの主旨

1945年（昭和20年）8月6日の原爆投下により壊滅的な被害を被った広島音楽文化も、現在ではプロのオーケストラを抱えるとともに全国有数のオペラ活動推進地となっている。こうした広島音楽活動、とりわけ洋楽文化の発展は、呉の海軍軍楽隊、広島高等師範学校の音楽教員の活動、広島女学院に赴任したアメリカ人宣教師の活動など、さまざまな人々の尽力により、明治から大正にかけて洋楽の流入が促進された結果であったと考えられる。また、音楽伴奏を伴う無声映画やレコードの普及、さらに昭和初期に始まったラジオ放送がその浸透に拍車をかけたものと思われる。けれども、原爆投下により多くの人材と文化財、また資料が消失した広島では、戦後の様子が語られることは多いのに対し、戦前の音楽活動が振り返られることはこれまでほとんどなかった。そこで、『広島音楽史』編纂プロジェクトを立ち上げ、広島における洋楽の普及と受容の過程を、戦前からの流れを含めて改めて追求することとした。またそのことにより、「ヒロシマ」という壊滅的な破壊を受けた一都市の文化復興の過程、様子を明らかにしたい。

○「普及」と「受容」について

以上の主旨のもと、本プロジェクトでは特に「洋楽」に着目しその受容と普及の過程をみることにした。ここで、次のことを確認しておく。すなわち、「普及」と「受容」という用語の概念であるが、広島で洋楽を普及させた人々（機関）は同時に最初の洋楽受容者でもある。しかし本プロジェクトが最終的に目指すのは、一部の富裕層、知識層による洋楽の受容だけではなく、より幅広い層の人々による洋楽受容の歴史についてである。よって、最初の受容者が洋楽の「受容者」であった点よりも、彼らが幅広く洋楽を「普及、浸透させた」点により大きな意義を見だし、着目することにした。

○4つの視点（分野）について

一方、本プロジェクトでは、広島における洋楽の普及に重要な役割を果たしたと思われる「公的機関」に焦点を当て、各機関における洋楽関連の活動状況をまずは個別に調査することとした。こうした機関が洋楽普及に果たした役割をみるとともに、そこから派生したと思われる活動や、機関同士が相互に連携、あるいは影響を与えながら発展していった活動など、これらの機関をとりまく洋楽普及のダイナミズムを捉えながら広島の音楽史をたどっていくのが最終的な目標となる。その機関として挙げられるのが次の4つである。

- ① 海軍軍楽隊（呉海兵団軍楽隊）
- ② キリスト教布教に関わる機関（ミッションスクール、教会）
- ③ 官立の学校（とりわけ広島高等師範学校、広島県立師範学校）
- ④ 放送局（広島中央放送局）

いずれも、日本における洋楽の普及と受容を扱った古典ともいえる堀内敬三の『音楽五十年史』（鱒書房、1942年）ならびに『音楽明治百年史』（音楽之友社、1968年）、また近年の体系的な成果である中村洪介・林淑姫の『近代日本洋楽史序説』（東京書籍、2003年）などにおいてもこれらの機関が焦点化されている。ただし、①海軍軍楽隊については呉地域における活動が中心となっており、市政制度で捉えた場合の「広島市」の音楽史には関連が薄いように思われる。だが、実際には広島の音楽団体や学校と音楽交流が頻繁に行われたり、また広島の放送局にもしばしば出演したりしたほか、退役した隊員が広島の音楽団体の創設や発展に大きな影響を与えたりするなど、広島地域においてもこの海軍軍楽隊の活動が重要であったとみられる。よって、本プロジェクトにおいても呉の海軍軍楽隊（呉海兵団軍楽隊）にも焦点を当てることとした。

○研究方法・対象とする時期の相違について

各機関の調査研究方法や対象時期については必ずしも一致しない。というのも、各機関により先行研究や資料の残存状況、入手状況は大きく異なっている。よって、統一感を求めるあまり各機関の役割や意義が不明瞭になってしまうことを避けるためには、方法論に相違が生じるのは仕方ないものと判断した。対象とする時期についても同様に、4つの機関が洋楽普及において重要な役割を果たした時期は異なっている。例えば、各機関の設置時期だけをみても、呉海兵団軍楽隊の場合は1890年（明治23年）に設置、キリスト教布教に関わる機関としてもっとも早い広島女学院大学の前身は1886年（明治19年）に開校、また広島高等師範学校は1902年（明治35年）に創設されている。一方、日本で放送局が最初に開局されたのは1925年（大正14年）、広島中央放送局の開局は1928年（昭和3年）である。

以上の内容を確認した上で、第一回中間報告会を開催した。報告会では、上記の①から④の順に15分を持ち時間として各担当者が発表を行い、その後、会場を交えての全体の意見・情報交換会を行った。フロアからは活発な意見、質問が出されたが、その詳細についてはここでは省略する。ただし、いずれの内容も、本プロジェクト、ならびに個別の研究内容の今後の方向性や課題として大きな示唆を与えるものであった。その際、実りある意見・質問や助言をくださった方々に、ここに記して感謝したい。また、本報告会の場を与えてくださった日本音楽学会西日本支部、ならびに支部例会担当の先生方にも深謝する。

2013年（平成25年）5月
「広島の音楽史」編纂プロジェクト
（文責；能登原 由美）

目次

呉海兵団軍楽隊が広島音楽普及に果たした役割 —先行研究の概観と今後の課題—	竹下 可奈子	1
広島の洋楽普及におけるミッション・スクール、及び母体教会の役割 —戦前の「広島女学院」と「広島流川教会」を中心として—	光平 有希	9
広島の洋楽普及における広島高等師範学校の役割 —吉田信太に焦点を当てて—	大迫 知佳子	16
広島の洋楽普及における放送メディアの役割 —『広島中央放送局開局十年史』にみる—	能登原 由美	22